越谷市郷土研究会主催

第二九二回

奥州道中、成立四百年記念史跡めぐり

日光道中

蒲生大橋～登戸三軒屋

宰内　高橋正澄

平成十三年九月二十四日

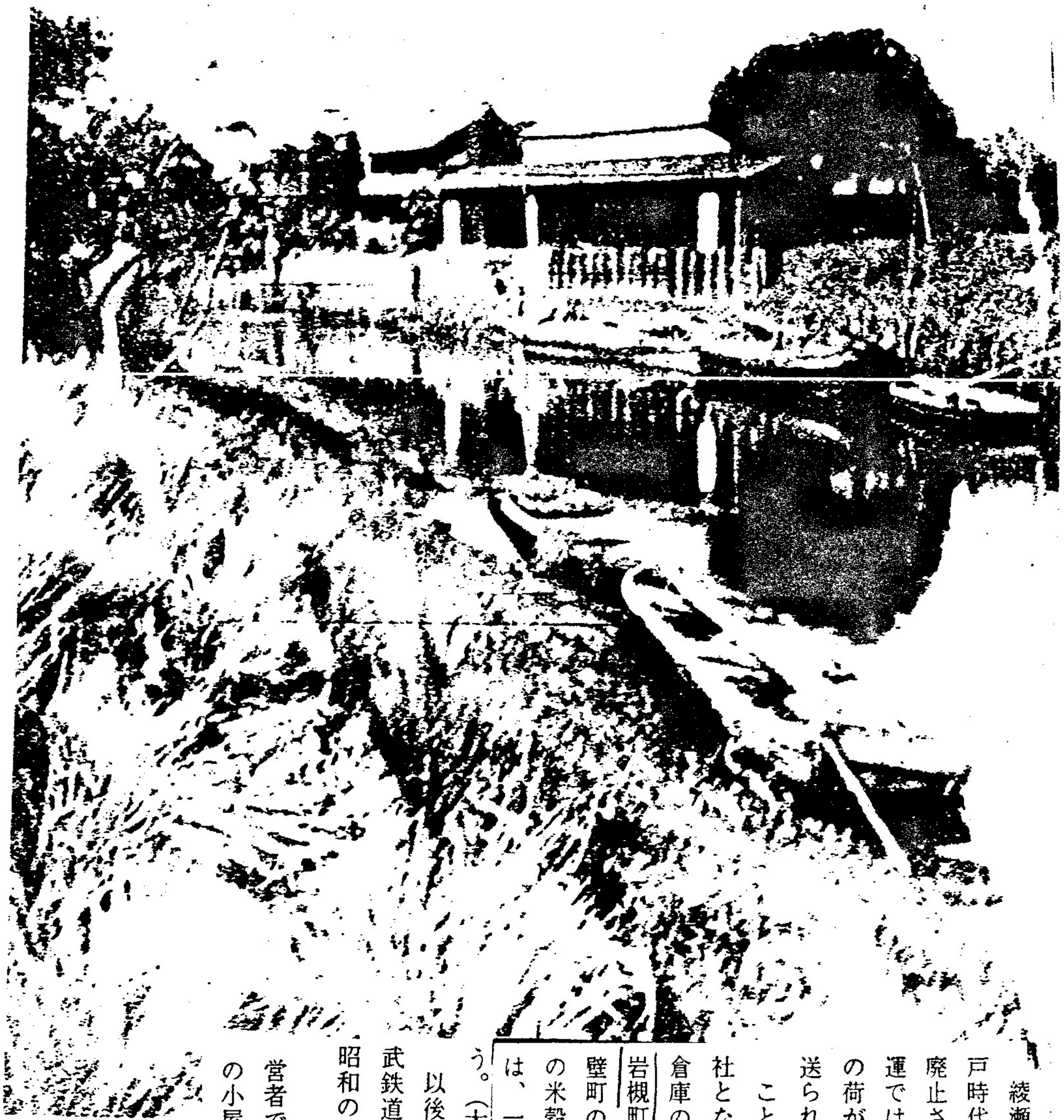
蒲生絵図より（市立図書館提供）

蒲生茶屋通り

明治五壬申年月

人家
寺堂
亡所
川堀
田畑
村境
古手

① 藤助河岸（昭和初期）



昭和10年代の藤助河岸（

（越谷市役所提供）

綾瀬川沿いの新田との境にある舟便による河岸で、江戸時代の中期頃に創立され隆盛をみた。鉄道の普及等で廃止されてゆく河岸場のなかで、なお繁昌した綾瀬川舟運では唯一の河岸場であった。それは越ケ谷町等の殆どの荷が東武鉄道を利用せずに、藤助河岸から東京方面に送られていたからである。

ことに同河岸は大正二年四月、資本金五万円の株式会社となり、以後武陽水陸運輸会社といわれ、陸上運送や倉庫の貸付業務等も取扱うようになった。舟運の品物は岩槻町の白木綿、蚊帳地（かやぢ）、胡麻油、蔬菜類。粕壁町の薬種実、醤油、味噌、米、麦、胡麻油。越ケ谷町の米穀類、わら縄、莚類、味噌等であり、年間の出荷高は、一万八〇〇〇余駄、着荷は二万駄以上に及んだという。（大正五年「越ケ谷案内」による）

以後、大正九年越ケ谷駅が設置され、越ケ谷の荷が東武鉄道便にとって変わり、次第に衰退の一途をたどり、昭和の初期には、事実上廃止され、現在、藤助河岸の経営者であった家は酒屋を営んでおり、着船時の積下し用の小屋は、復元されて現存している。

（蒲生歴史物語提供）

⑤出羽橋 ④蒲生下茶屋

② 蒲生大橋（昭和初期）

- 土橋 埼玉郡と足立郡を結ぶ。長さ十三間四尺（約二十三メートル）幅 二間四尺（約五メートル）
- 木橋 大正七年六月
- 補修 昭和四十年
- 〃 昭和四十八年（重量二トン）
- 永久橋 昭和五十年八月
- 新綾瀬大橋 平成元年 長さ七十八メートル 幅 十五メートル
- 越谷市役所提供
- 句碑 越谷側 水野長福
- 草加側 高浜虚子

資料ⒶⒷⒸⒹ参照。綾瀬川改修のため……三二軒転居

土橋、岩槻道（慈恩寺道）道沼・伊奈・麦塚・槐戸への分岐点。
曽・庚申塔・成田山への道標あり

③ 蒲生一里塚

（越谷市史編さん室提供）

江戸時代の各道中には、旅人行程の目安として一里（約四キロメートル）ごとに一里塚が築かれていた。そして、その多くの一里塚には、目印として、エノキが植えられていた。

蒲生の一里塚は、日光旧道蒲生の南端、旧出羽堀の東側に位置し、塚には、エノキ・ケヤキ・イチョウなどが生い茂っている。

蒲生地区では、古くからこの山を『一里山』と呼んでいたことや『新編武蔵風土記稿』などに記されていることから、一里塚がこの小山であるといわれていたが文化年間（一八〇四～一八一八）編さんの『五街道分間延絵図』により一里塚であることが確認された。

これによれば、この一里塚は、道中の東西に築かれているが、西側の塚は、民家の庭になり、その後、綾瀬川の拡張により消滅した。

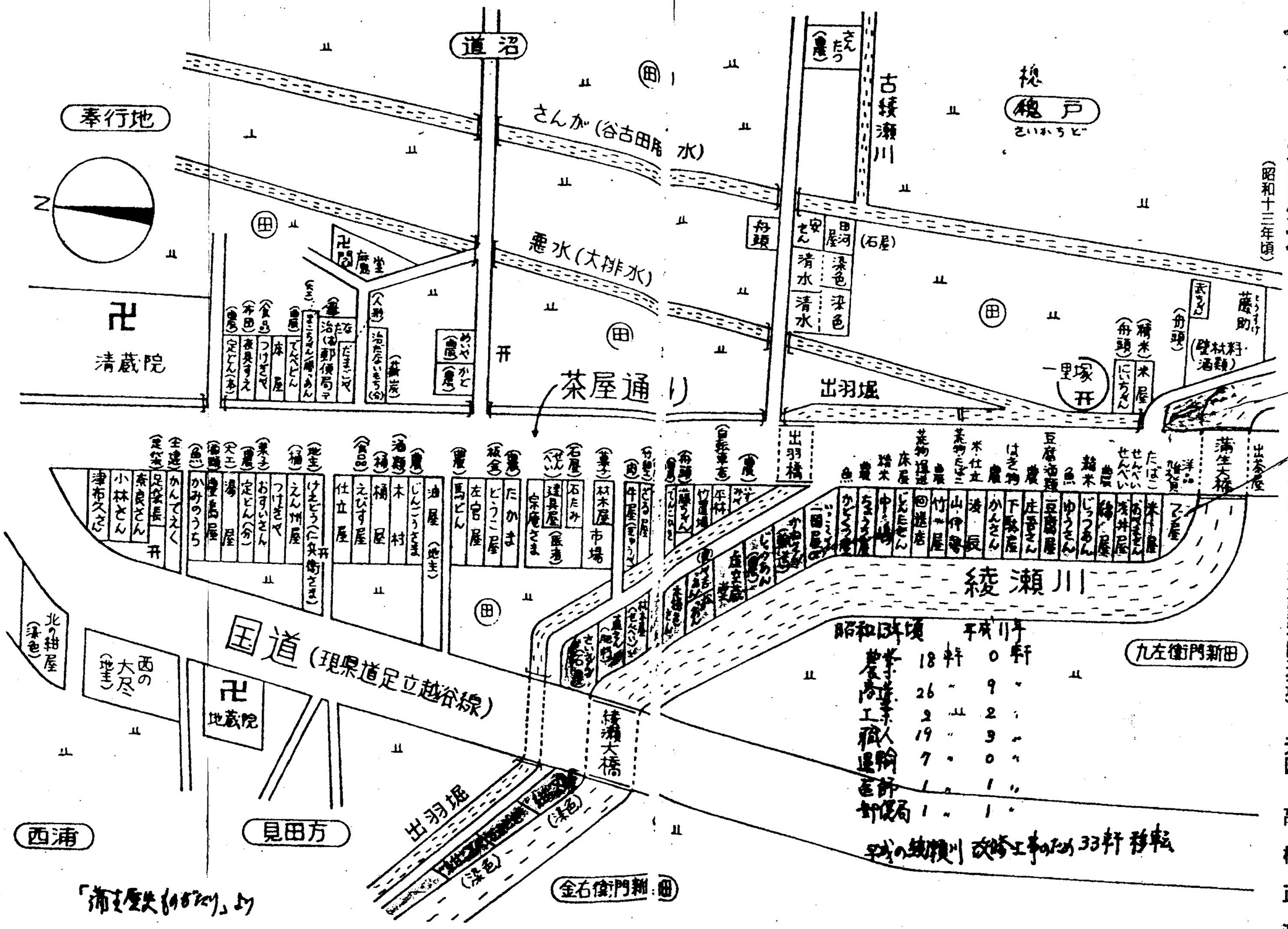
（越谷市の文化財より）

Ⓐ

茶屋通り（現蒲生二丁目～蒲生二丁目～蒲生愛宕町近辺）

（昭和十三年頃）

元図――高橋正澄



	昭和13年頃	平成11年
農業	18軒	0軒
商業	26 〃	9 〃
工業	2 〃	2 〃
職人	19 〃	3 〃
運輸	7 〃	0 〃
医師	1 〃	1 〃
郵便局	1 〃	1 〃

平成の綾瀬川改修工事のため33軒移転

⑥ 虚空蔵堂

旧出羽堀にそい、日光道から左折した道は、慈恩寺道とも称された古道で、この道端には、古くから虚空蔵菩薩が記られていた。ここには、文明一五年（一四八三）銘の青石塔婆をはじめ、正徳元年銘の笠付青面金剛や、観音の座像を載りた「これより ちおんじみち四里」と刻まれた、寛保四年（一七四四）銘の道しるべが建てられており、集落の人びとに親しまれてきた信仰の中心ともなっている。

（わが町 愛宕町の故事来歴）

⑦ 中尾宗庵宅

初代、二代宗庵・医業のかたわら、文政三年（八三〇）～明治五年（八七二）まで、当屋に箕山塾を開設、五〇余人の門弟を輩出している。松丸建・中野柳助・文香夕どの有為な人材を世に送っている。また医業においても、急患があると、風雨・大雪・深夜におそれず、応診をいとわず、困窮者には薬料を請求しなかったとのことで、人々から「宗庵様」と称され、尊敬された。

（蒲生小学校沿革史）

⑧ 油屋

蒲生村きっての地主・明治以降、村政・県政の中核として活躍した家柄（清野孝蔵氏）。江戸期、油業を営んでいたことから通称「油屋」と呼ばれている。

⑨ 不動道追分

日光道から大相模不動への分岐点、付近に「えびす屋」「だいこく屋」などの茶屋あり。明治九年、三遍字内朝は、この茶屋、いろいろかで、盆、三日、馬、いのまつすや粉粉氷」と言う句を残している

旧日光街道、蒲生片町焼米茶屋、その茶屋組より奉行地への入口に、石仏が二体安置されており、その内の一体が通称「不動さま」と言って、付近の人々の愛称になって現在でも多くの方が、お参りされている。台石の表面に「是より大さがみへ」と深く刻まれ、向かって右側に「時于享保十三戊申九月二十八日」さらに左側には「施主江戸新乗物町講中」と刻まれて居り江戸中期頃かと思われる。江戸の人々が、大相模の不動尊にお参りに行く時の道しるべに、駕籠やさんなどの関係者が先祖の供養の為建てられたと推測される。尚、古い書物の蒲生村の地図には、野道西方村大相模不動江道法二十八町と、

蒲生の旧日光街道

⑩ 神明社

距離が記されている。さて昭和の初期まで、当時紺屋の職人さん達が、寒参りの為、綾瀬川の水で身を清め、白の袢纏・白の半股引、晒で腹巻をしめ提灯を持ち夕刻、この不動様にお参りし現在の二丁目、三丁目を通り大相模不動尊に、かけ足でお参りする姿を見られた。

あとの一体の石塔は庚申様で、江戸時代、土地の人達が、疫病等の侵入のない様にと念じ、又庚申講も広まり、念仏講と習合したり、農神としても崇め仏教と神道の結びつきによる信仰かと思われる。

（蒲生歴史ものがたり）

当社は『郡村誌』によると、享保十九年（一七三四）二月勧請、祭神、天照大神、祭日十一月三日、小名、見田方、十七戸の氏神と伝えている。

天明八年（一七八八）四月、拝殿一棟創建、寛政六年（一七九四）三月、本社再建、いずれも大熊仁兵衛によるもので、往時は面積、百七十四坪、神楽殿まで備えた社であった。

末社、牛頭天王（素賀神社）、祭神、須佐之男命　祭日七月十五日、宵宮十四日、地元では天王様と称し、

（蒲生歴史ものがたり）

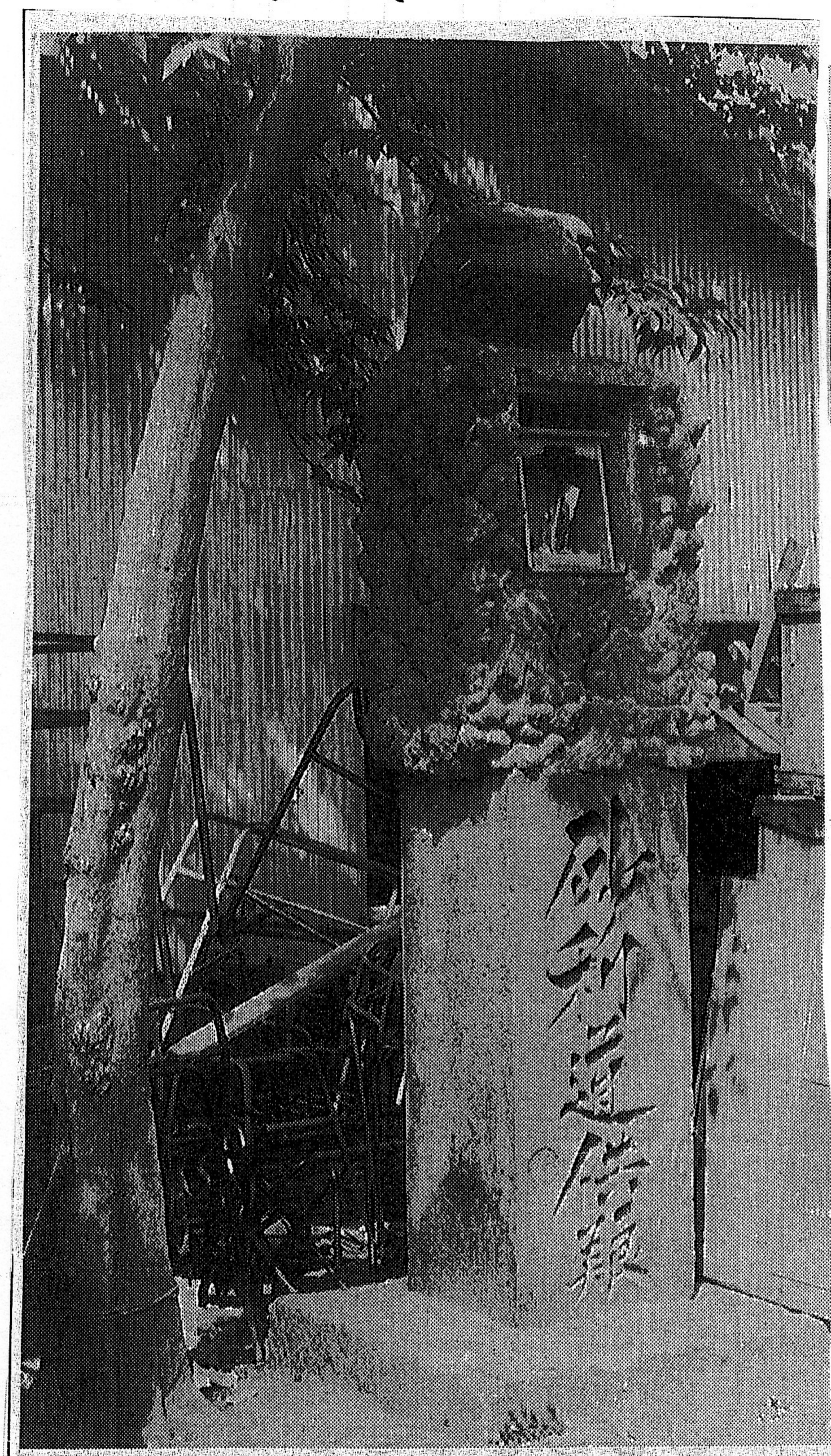
かつては笛、太鼓の囃子で神楽が奉納された。また、若者、子供等によって、神輿が担がれ、夜店なども出て大いに賑わった。

現在、社も祭の規模も縮小されたが続いている。

境内には、文政十三年（一八三〇）銘の神明宮の祠御神木の松の根株、「きよ、しん、さん、はる」と女人の名が刻まれた明和七年（一七七〇）銘の庚申塔がみられる。

なお、村社、久伊豆社に合祀されていた天王社は、最近、氏子の要望により元の神明社境内に戻っている。

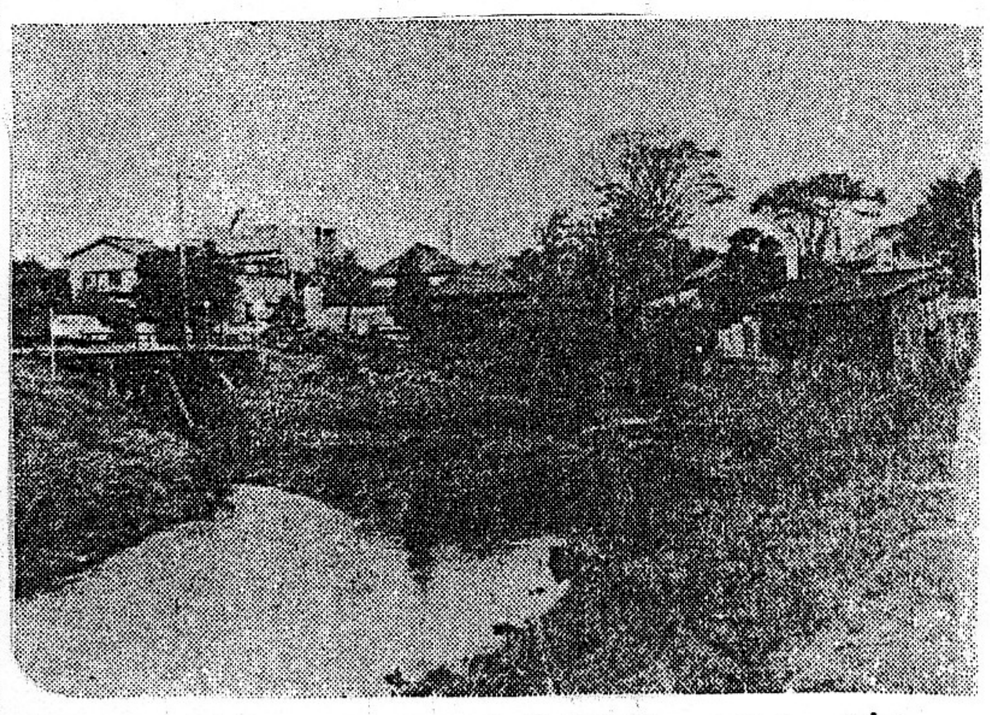
道
石地利供養塔（ぎょうだいさま）



旧日光街道沿いに立つ「ぎょうだいさま」。その顔は鳥か、河童か。胴体には四角い穴が開き、その下には向かい合った鬼のような浮き彫りがある。今は社の中にあり、全体像は見られない（越谷市提供）

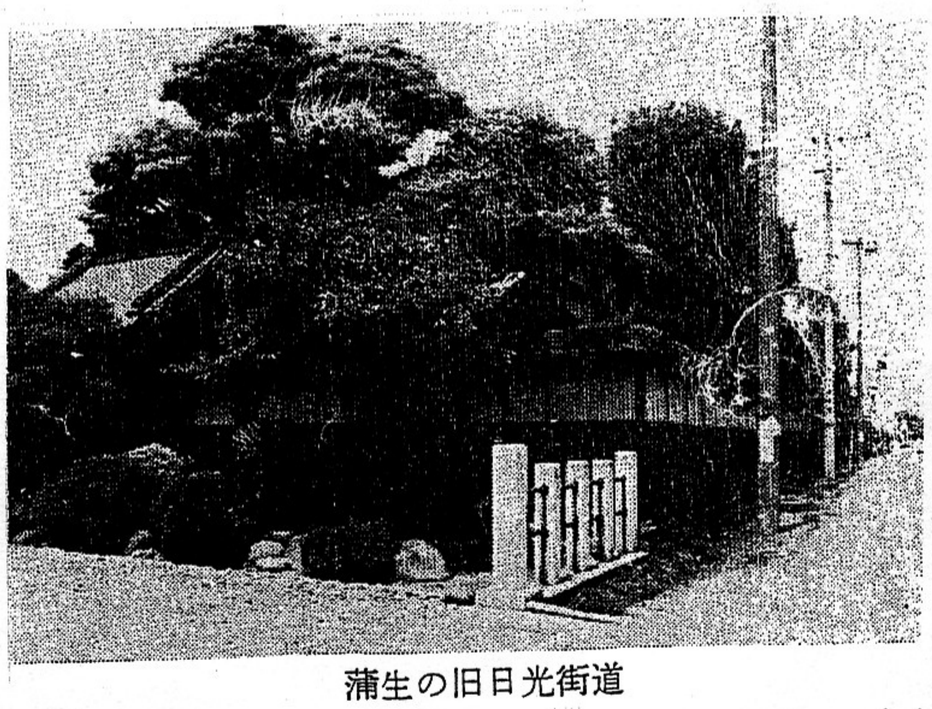
埼玉新聞より

蒲生大橋と葛西河岸



（昭和40年代）

清村家（油屋）



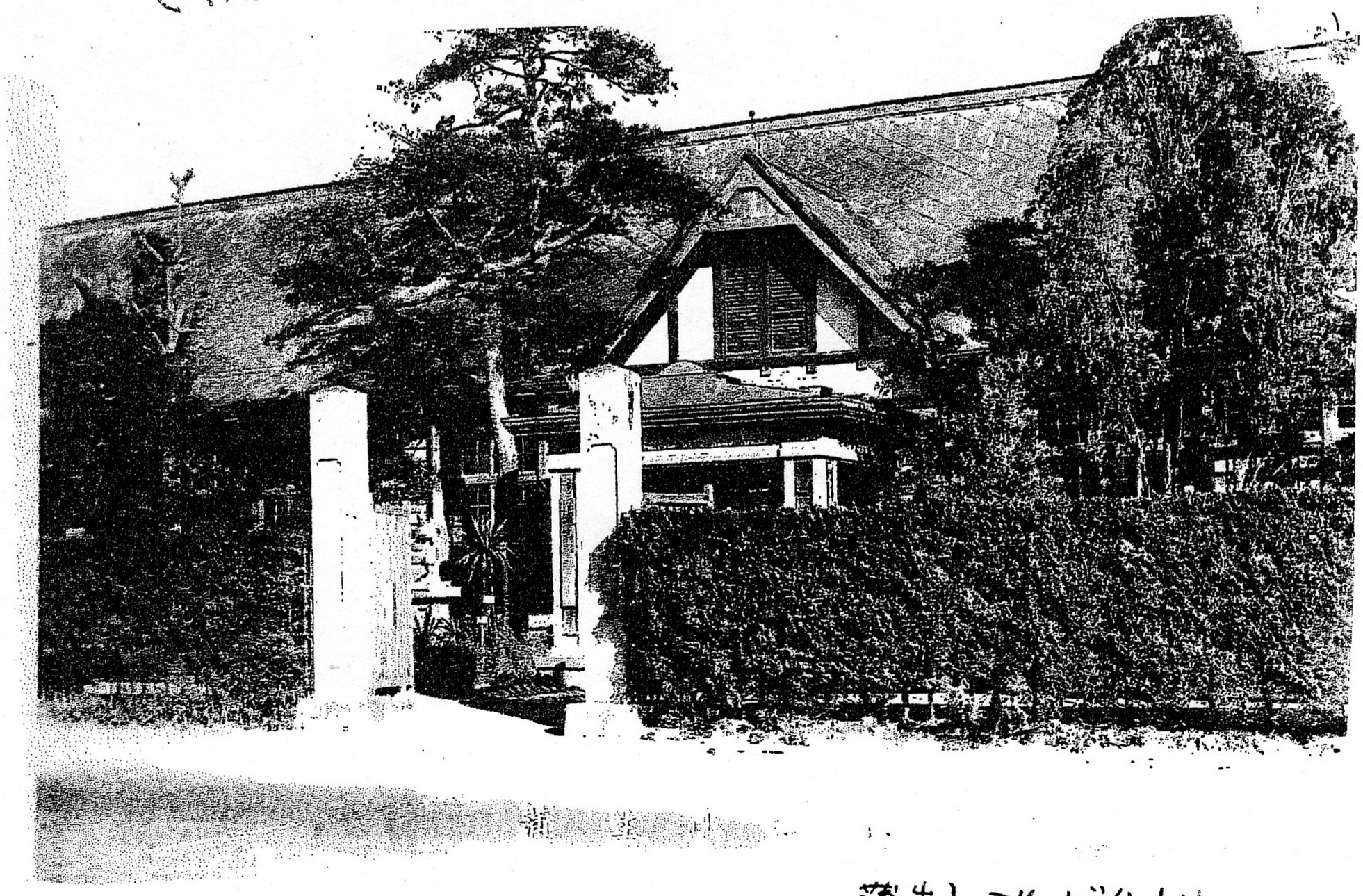
蒲生の旧日光街道

（昭和60年代）

蒲生小学

（明治33年～昭和）

（大正～昭和）



蒲生小アルバムより

⑪ 砂利道供養塔（ぎょうだい様）

蒲生一丁目自治会館近くに、蛙か烏か、河童（かっぱ）のような得体の知れない形の石塔がある。その台石に、「砂利供養」と刻まれ、宝暦七年（一七五三）の年号とこの石塔建立の人の名が刻まれている。地元の人々は、これを「ぎょうだい様」と呼ぶ他に「おかま様」または「ぎょうじゃ様」とも呼んでいる。石塔は、この年に日光街道大修理が行われ、道に砂利が敷かれた記念碑である。また道路の神様といわれ、旅の際の足を痛めないよう、道中の安全を祈って建てられ、わらじ等が供えられていたといわれ、現在も健在である。

ぎょうだい様（砂利道供養塔）

⑫ 仁兵衛屋敷跡

大熊家菩提寺光明院に残されている記録及び新編武蔵風土記によると、大熊三郎左エ門が、慶長年間に大熊久兵衛家（現在の蒲生三丁目にあったようだがその跡はない）より分家した。紀伊熊野に生まれ、紀伊中納言の臣下安藤氏の家来仁兵衛が浪人となり、大熊三郎左エ門宅に来た。その人品才智が勝れていると見て、三郎左エ門の娘婿とした。大熊家は四十二町歩の土地を持っていた。

仁兵衛に二人の男子ができ、仁兵衛元和二年（一六八二）死亡。その遺言により、兄三郎左エ門は二十一町歩と家財の半分を持ち、母を伴って光明院近くに屋敷を構えた。その後名主の土地を買い、街道に屋敷を造った。それが一丁目の旧日光街道添い（茶屋通り）の屋敷と思われる。それが仁兵衛家の後の呼び名「かいどう」の起こりではないかと推察される。そして初代仁兵衛を先祖とした、以後代々仁兵衛を名のり、村の名主も世襲し、蒲生の草分けとなった。

宝暦九年（一七五九）初代仁兵衛死後七十七年に、享保十七年（一七三二）の洪水により大飢饉となった折、多くの窮民を救ったということで幕府より褒賞として、白銀三枚賜っている。同年、菩提寺光明院に田三反十四歩の寄進をした。この頃、短刀・定宗の刀など、先祖の所有物として蔵していたそうだ。

大熊家の屋敷は、現在の一丁目の大半を占めていたようだ。久伊豆神社の東に流れる出羽堀に添った家に「おやしき」という呼び名がある。また神社の北にある紺勘さんは、先々代が大熊家からこの土地を買って、住むようになったという。昭和初期まで残っていた大熊家の屋敷跡には、現在三十戸程の住宅・店舗・倉庫・作業場・集会所等が建ち並び、かつての広大さを物語っている。

（蒲生歴史ものがたり）

⑬ 高札場

⑭ 清蔵院

新義真言宗　足立郡原村（現川口市）密蔵院末、慈眼寺と号す。本尊は、十一面観音、開山、祐範、寂年を伝えず。中興の僧、永智、明暦四年（一六五八）三月二十一日寂す。

表門、龍獅子獏の彫刻物あり。古色に見ゆ。左甚五郎作という。

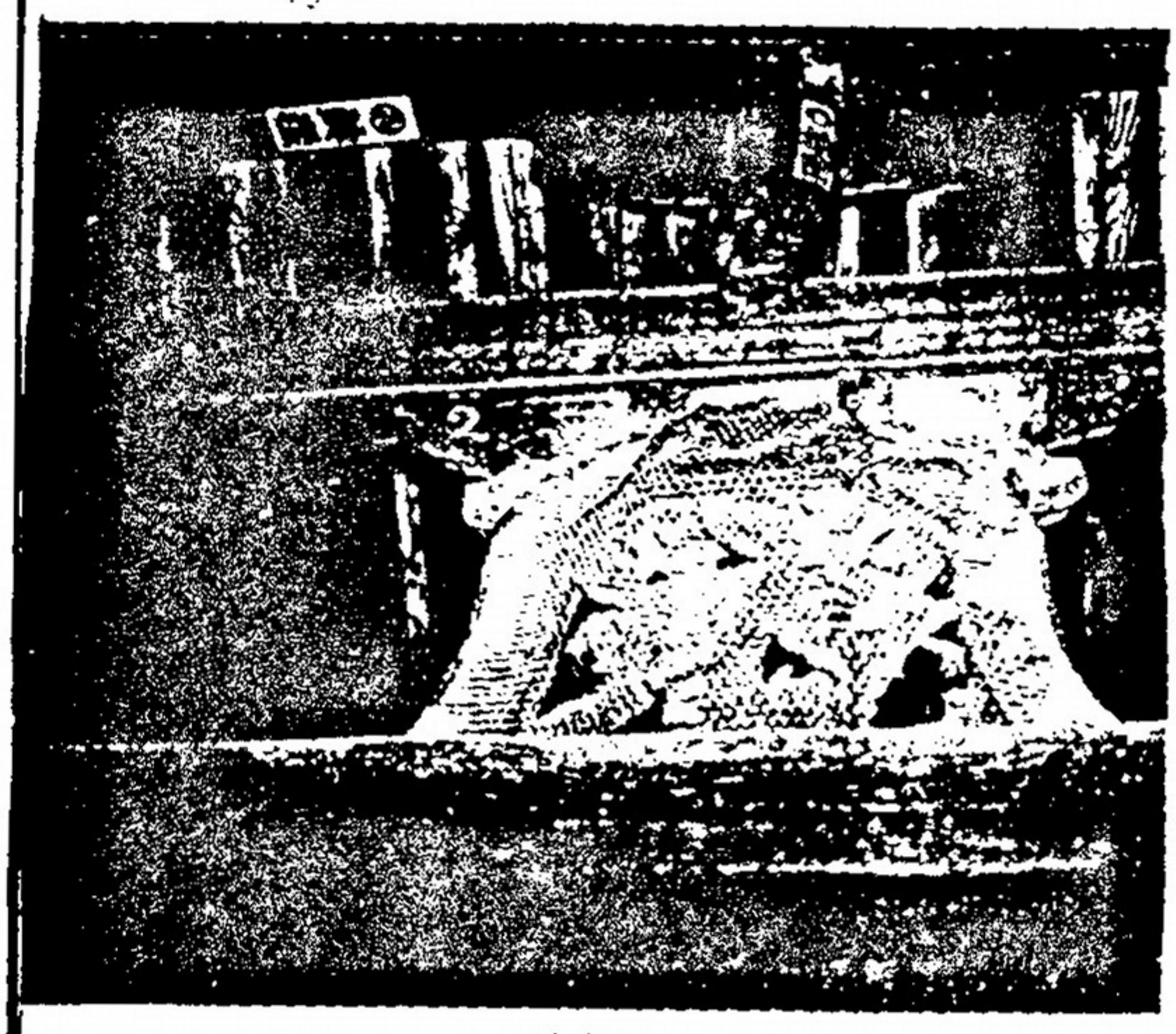
鐘楼は、元文四年（一七三九）の銘あり。閻魔堂、辨天社　（新編武蔵風土記稿）

●清蔵院の山門（市指定）昭和五十九年九月二十七日

蒲生清蔵院の山門は、屋根など部分的に改造されているが、その棟札により寛永十五年（一六三八）、関西の工匠による建立であることが確認されている。

ことに、欄干に掲げられている龍や虹梁の彫刻なども江戸初期の素朴な彫刻様式とうかがわせている。

なお、この山門の龍は、巷間の伝説では、左甚五郎作といわれ、夜な夜な山門を脱けだして田畑を荒らしたことから、これを網で囲ったという。おそらく、この山門の建立者は、日光東照宮造営に動員された工匠の一人が日光への往返に世話になった因縁から、東照宮竣工（寛永十三年）後再び、国元から蒲生に来て、この山門を建立したものと推察できる。



清蔵院の山門

（越谷市の文化財）

西の大尽

⑮（中野家）

中野家の始祖は、その家譜によると中野左近と称し、豊臣秀吉の家臣であった。天正十八年（一五九〇）秀吉に随って小田原北条攻めに参戦、次いで奥州攻に向かったが途中瓦曽根の地で病に倒れ、しばらく当地に滞在していた。その後、慶長二年（一五九七）蒲生の現在地に土着してこの地の開発に努め、蒲生西組の名主を勤めるようになった。

この家には宝暦十二年（一七六二）の蒲生村検地帳をはじめ、奥州出羽三山や相州大山参りの貴重な道中記などの古文書が多く残されている。

（蒲生歴史ものがたり）

⑮ 久伊豆社 (2) 清蔵院持

(1) 光明院持ち久伊豆(松社)

久伊豆三宇　一は、光明院持ちにて、村の鎮守なり、応永年中（一三九四～一四二八）の鎮座をいう。
一つは、清蔵院持ち、一つは、村民持ちなり
（新編武蔵風土記稿）

久伊豆社は『埼玉郷土辞典』によると、飛鳥時代、欽明天皇（五三九～五七一）のとき、岩槻大田に、土師氏が出雲から勧請し、社殿を奉建したのが始まりと記されている。

それに、久伊豆社は、綾瀬川と古利根川、新方領、隅田川（春日部・岩槻）を経て、元荒川（利根川の合流路）にかけての間だけに分布する社である。

このことは、平安末期から鎌倉時代に活躍した武蔵七党の野与党一族の支配地と重なることから、久伊豆社は、野与党の氏神とみられている。

従って、蒲生の久伊豆三社の勧請も、野与党支配の影響と解しても不思議ではない。

因みに、綾瀬川の西は、いずれも、永川社、古利根川や元荒川の東は、すべて香取社と、はっきりと区分されている。

現在、境内には、元禄十三年（一七〇〇）銘の青面金剛庚申塔や榛名神社、体守護神社、昭和三十五年、総工費二十五万円で建立した花崗岩の大鳥居、神社仏閣巡拝記念碑、御手洗石、植林奉納碑、大東亜戦関係兵士願解消碑神、また、社殿裏手には、当地、中野光治郎（海力）が、大正八年に奉納した三十五貫、四十二貫の力石がみられる。

(2) 清蔵院持ち久伊豆

清蔵院持ちであった久伊豆社は、新国道（現足立越谷線）ぞい、新旧道の合流点近くに再建されている。

かつては、もっと境内が広く（九七坪）樹木も植えられていたとのことであるが、新国道新設により、境内が縮小されたとのことである。

境内には、文政七年（一八二四）銘の文字庚申塔がみられる。

社は、現在、土地所有者である西町一丁目の浅見家が守護している。

㉑日光道改修寄付記念碑

●日光街道道路工事費用寄附記念塔

日光街道（現県道足立越谷線）沿いの元蒲生公民館の構内に、宝暦七年（一七五七）造立の柱型の石塔が建っている。正面には「これより北、長さ三〇〇間の場所、常州茨城郡神山勝秀」と刻まれ、その横面には「比内一〇間の場所野州芳賀郡染谷長俊寄附とある。石塔は、同年の日光街道道路工事に、三〇〇間（約五四〇m）にわたる道路工事の費用を寄附した神山、染谷両名が記念して建てたものと思われる。これからみても、当時の道路工事には沢山の人達が喜んで協力しており、道路を自らの手で大切にしていたことが偲ばれ、人々の人情の良さが感じられる。

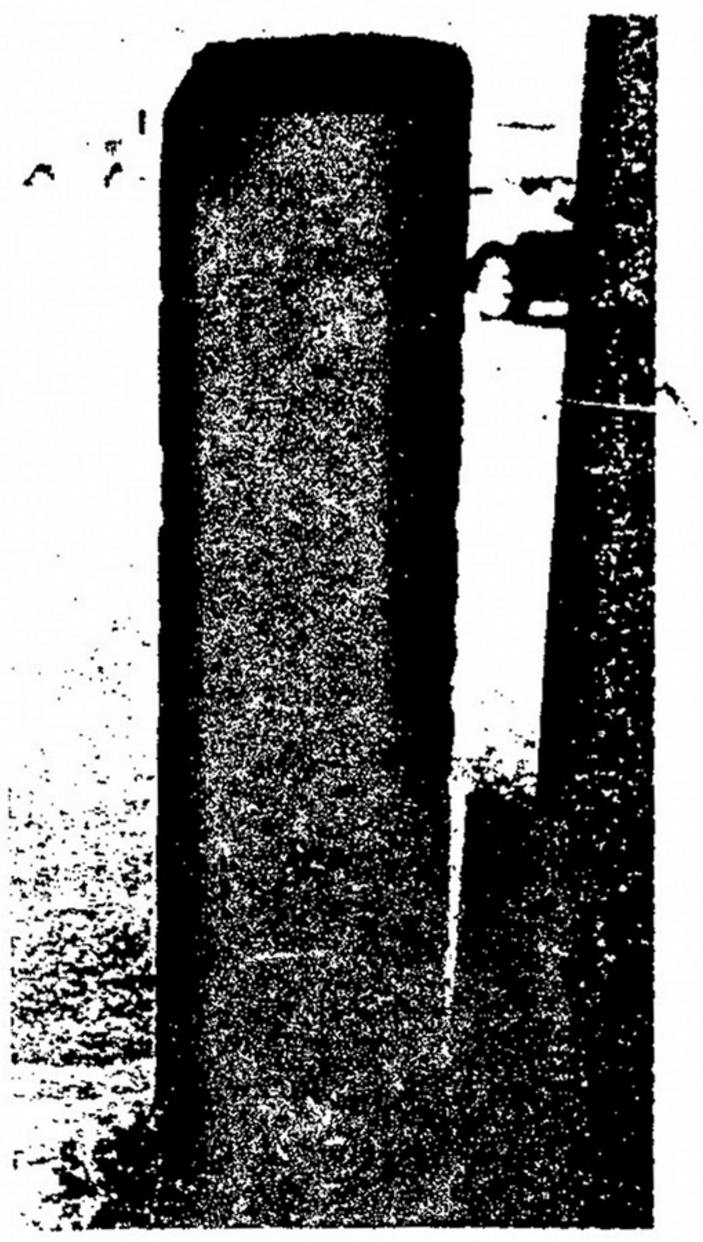
㉓明治天皇田植御覧の地 蒲生村顕彰の地

●蒲生村顕彰の碑・記念碑

旧四号線（現県道足立越谷線）に三軒家（前出集落図）という地名があった。現在の浦和別府線より少し南に当たる所が、蒲生村顕彰の地である。

昭和三十一年の建碑になる「明治天皇田植御覧之処」と刻まれた碑が鉄柵の囲いの中に収められている。これは、明治九年六月三日、明治天皇が東北巡幸の途中に、国道左右が水田地帯で、蒲生小学校北側から三軒家に至る間での田植えを御覧に入れた所で、天皇は白根県令の先導により興味深くこの作業を観覧されたといわれている。

この囲いの中には、明治三十九年建碑の「忠勇碑」、日清日露戦役蒲生村従軍者名が刻まれた同年銘の石碑、大東亜戦争における蒲生村殉死者の名が刻まれた昭和三十九年の「忠魂碑」、それに昭和四十七年の四ケ村用水組合八十年「記念碑」が立てられている。



日光街道道路工事
費用寄付記念碑

7

四　三軒家（現南越谷一丁目近辺）　元図――関根初吉・関根政男

蒲生地区コミュニティ推進協議会広報「コミ協蒲生」より4編

追想

高橋正澄

5 明治天皇 田植叡覧の地 蒲生村のこと

小学生の頃（昭和十三年～十九年）誰かに「蒲生村の誇りは。」と、問われれば、私に限らず、当時の村民であれば、誰もが、「明治天皇の田植御叡覧の地」と答えたに違いない。

それも、そのはず、当時の蒲生村の村章は明治天皇の御車の車紋を図案化したものなのである。

従って、私どもが、いつも目にする蒲生小学校の校旗や校章も、そしていつも耳にする校歌も明治天皇の田植叡覧に由来していたのである。

校歌

一、明治の帝の大御幸
迎えまつりて早苗とる
御民のわざをいそしみし
誉の里ぞ蒲生なる

（二、三割愛）

（校旗校歌戦後廃止、現に改む）

昭和九年編纂の『埼玉県史』によると、明治天皇は、明治九年（一八七六）六月二日、奥羽地方御巡幸のため、岩倉右大臣、木戸内閣顧問、大久保参議等の諸官を供に、赤坂の仮御所を御出立、同日、草加宿の大川惣右衛門宅を御在所とせられている。

当時の埼玉県令、白根退助は、当日、草加の御在所に伺い、祝辞を奉じるとともに、『埼玉県誌略』を始め、諸記録を奉呈し、県の近況を報告されたとのことである。

翌、三日、午前八時三十分、御一行は、御在所を御出立、大沢町、福井権右衛門宅にて御小休せられたが、時、あたかも、田植の時期、途中、蒲生、登戸付近は、至る処に菅笠の群れが見られ、田植唄が響き渡り活気に満ちていたとのことである。

蒲生、登戸村では、二百名の男女が、皆、揃いの野良着で、馬、五頭をもってする田植の実況を御覧に供し、酒料御下賜の御沙汰があったとも記されている。

また、昭和五年五月一日発行の『蒲生村時報』（瓦曽根、浅見氏所蔵）には、当時、十九歳で、この田植叡覧の栄に浴した浅見足穂氏の『田植天覧の思い出』と題する手記が掲載されている。

これは、氏の実体験だけに、内容も、よりリアルで興味深い。

これによると、田植の叡覧は、白根県令の上奏によって実現されたとのことである。

おそらく、白根県令は維新間もない不隠な世情を考慮し、田植を通して、県民の新時代へ寄せる意欲の度を示したかったのではないだろうか。

それだけに、その準備も、また、周到であった。

当日は、蒲生、登戸、瓦曽根、七左衛門、大間野各村に在住する、田植に慣れた二十歳前後の男女、各二十名程が、各村ごとに、植子として抜擢されている。

しかも、保護者付き添いでの参加には驚きである。

当日は、晴天。午前十時頃、近衛騎兵によって護衛された御車が、白根県令の先導で、登戸村（現南越谷一丁目、蒲生村顕彰の地）付近の路上に差し掛かると、真新しい、揃いの野良着に、男は白、女は紅の襷に菅笠を被り、村役人に引率されて登場、物々しい警官警護の中で田植を御覧に供じたとのことである。

田植の叡覧から、今年は、百二十一年になる。過日は、久しぶりに、小学校時代、除草に出かけたこともある。蒲生村顕彰の地を訪れてみた。当時は、確か、杉菜に覆われた敷地の中央に、大山 巌書の『忠勇碑』と『日清、日露戦争従軍者の碑』二基だけであったと記憶している。それが、現在は『大東亜戦争殉国英霊』『四ヶ村用水組合創立八十周年』そして、一番、左手に、前述の『明治天皇田植御覧處』の碑が建ち並び、近代蒲生村の時の流れを静かに物語っている。

出典資料／「蒲生小沿革史」より

元蒲生小学校校長
高橋正澄先生の

3　愛宕様（一里塚）のこと

少年の頃、通称『あたぐ様』と呼ばれていた蒲生下組（現愛宕町）の愛宕神社は、文政五年（一八二二）編纂の『新編武蔵風土記稿』によると、『小名、下茶屋、ココニ、一里塚アリ、塚上ニ杉樹植エ、傍ニ愛宕社アリ』と記されている。

この塚が、文化年間（一八〇四～一八一八）幕府編纂の『五街道分間延絵図』と合致することにより、日光道中の一里塚と確認されたのは、ずうっと後の昭和も五十年代のことで、それまで、地元でも、一里塚のことが話題になることはなかった。

この愛宕様の鎮座する老樹聳える一里塚こそ、私達少年が数々の思い出を刻んだ懐しい遊び場だったのである。

私達悪太郎は、危険を返り見ず、よく、これら樹々に登り、そして、大人達に叱られた。

勿論、今は失せた『記』に記述されている骸になった杉の樹にも登った。

それから、出羽堀に向かって這うように伸びた銀杏や松の老樹にも、それに、社の屋根伝いに登る欅の大樹にも挑戦し、これらを征服した。

当時、好奇心旺盛な少年達は、樹上から綾瀬の川筋や街道沿いの家並みや田園に浮かぶ集落など、まるで、時が止まったような閑なふる里の風景を眺め、楽しんだ。

しかし、塚の北端に聳える榎の大樹だけはとうとう、征服できずに終わってしまった。

今でも、時折り、農耕の合間をみては、その人を寄せつけぬ雄姿を仰ぎ、好奇心に燃えた少年の頃を思い、懐しんでいる。

また、これら樹々の下では、見知らぬ人々の様々な姿をも目にすることができた。

とりわけ、夏の昼下りなど、蝉時雨を耳に涼をとりながら、弁当をつかったり、荷造りをしたり、昼寝をしたりする行商の人々を、よく、見かけた。

時には、富山の薬屋のように、紙風船をくれたり、地方の珍しい話や怪談めいた話をしてくれる人もいて、少年達の目を輝かせた。

一度、若き修行僧が筆に水をつけ、黙々と新聞紙に文字らしきものを書いては瞑想する異様な姿を見せてくれたことがある。

私は、この修行僧の仕草が不気味で、遠くから、息を飲んで眺めていたのを覚えている。

日頃、静かな愛宕様も、七月二十三日、二十四日になると、周囲の雰囲気は一変する。

この両日は、氏子待望の愛宕様『祭神：迦具土命（火防の神）』の祭礼なのである。

少年達は、綺麗に清掃された社や出羽堀沿いに飾られた箱灯籠を眺めたり、茶店から漂う焼き団子の匂いを嗅ぎながら、夜、一年ぶりに賑わう夜店への思いで胸が弾んだ。

誠に、罰当りなことではあるが、私の頭には、祭礼当日、社に詣でた記憶がない。

ただ、アセチレン灯の輝く夜店で、おもちゃや古本を物色した記憶だけが鮮明に残っている。

私は、ぜんまいではなく、ろうそくの熱で「ポン。ポン。ポン。」と快適な音を発して走るブリキ製のボートが不思議で買ったことがある。科学の面白さを知ったのも、多分、この頃ではなかったかと思っている。

あれから、五十数年、愛宕様を取りまく風景は、すっかり変わってしまった。

そんな中で、塚下に並ぶ石仏と老樹に覆われた愛宕様だけは、昔と変らず、泰然として、先人の心や自然の摂理を語りかけている。

かつて、目の不自由だった曾祖母が「愛宕様へ…。」と言っては出かけ、塚下の不動明王から十三仏礼拝供養塔、六地蔵、そして、愛宕様へと順に足を運び、長々と祈り、語りかけていく気持ちも分かるような気がする。

あの僅か十数坪の地、愛宕様には、過去、三百数十年、先人の生きた、様々な思いが秘められているのである。

●参考文献
新編武蔵風土記稿…歴史図書社
越谷歴史物語……越谷市教育委員会
日光道中……埼玉県教育委員会

追想

元蒲生小学校校長 高橋非滋先生の

4　茶屋市（牛蒡市）のこと

越谷で『市』といえば、室町の昔から栄え、今でも、場所を変えて営まれている越ヶ谷の六斎市（二・七の市）が有名である。

往時には、米穀類の相場まで立ち、近郷近在の人々で大いに賑わったとのことである。

私も戦前、炙をすえた帰りに、一度だけ、祖母と街道を歩きながら生活用品の並ぶ『越ヶ谷市』の光景を見た覚えがある。

ところで、吾が蒲生にも、年に、たった一日、いや、半日かもしれない。

年末の二十四日には、蒲生茶屋上通りに、歳の市、通称、『茶屋市』が立った。

私にとっての『茶屋市』は、戦争中の昭和十三年から十八年までの少年時代と二十五年から三十三年頃までの青年時代であるが、とりわけ、おもちゃや食べ物に惹かれ歩き回った少年時代の印象が深く、懐しい。

『市』当日は、幸か不幸か、丁度、二学期の終業式に当り、通信簿の成績如何では、小遣銭への影響もあり、この期の成績には、特に気を揉んだ。

『市』は、現在の蒲生一丁目、神谷燃料辺から蒲生郵便付近にかけての約百メートル位の沿道に立った。

歳末ということもあり、正月用品が主で、神棚や門松を始めとする各種飾り物、御玉杓子、柳箸、笊や瀬戸物類、それに、下着等の衣服類もよく並んだ。残念ながら、『牛蒡市』にふさわしい牛蒡等の野菜が並んだ光景は、記憶にない。

そんな中に、私達少年の目指す、おもちゃや駄菓子を売る店が散在していた。

私は、吹き矢に魅せられ、そして買った。

確か、五銭であったと記憶している。口径約一センチ、長さ約五十センチのボール紙製の筒で、しかも、金紙、銀紙を螺旋状に巻いたかなり派手なものであった。新聞紙で作られた円錐形の矢を入れ、「スポッ」と吹き、「プッン」と標的に当てる遊びは、まるで、昨日のことのように覚えている。

それに、リヤカーの屋台で売る、おでんやどんどん焼き（お好み焼き）も、家の人には内緒で、よく食べた。葱、生姜、切り烏賊と、少々、値は違うが、皿代わりの新聞紙に載せて、ソースの匂いを嗅ぎながら、ふう、ふうしながら、友と食べる味、その雰囲気は格別で、少年時代を語る上で欠くことのできない楽しい思い出である。

こんな『茶屋市』も、戦争による物資の不足は如何ともし難く、まず、食べ物や衣類から消えた。

人々は、年々寂れいく『市』の姿を傷心の思いで見つめ、往時を懐かしんだものである。

しかし、『市』が盛況だった戦前に、青少年時代を過した人々の話によると、私が見た『市』よりも、はるかに、規模が大きく、ずうっと、上手の方から、安行方面の良質の牛蒡や人参里芋等を始め、数の子や鰊等の乾物類、古着や端布を売る呉服屋まで出店して、近隣の老若男女で賑わったということである。

一頃、浅草専門の『いねやモスリン店』が鳴り物入りで出店し、人気を博したそうである。当時、夜なべをして縄ないで稼いだ穂待九十銭で、チリメン一反を買ったが、家へ帰って見ると、ファイバーと分かり、父親に叱られたと、苦い体験を話してくれた人もいた。

こんな、蒲生の歳末の風物詩も、交通事情や流通機構の変化により、四十年代には姿を消した。しかし、『茶屋市』の名残りか、一店だけ、まだ、清蔵院の参道に出店し、年末を飾ってくれるのは嬉しいことである。